



2014・6・7

SORA 55号

熊本 松田 明子

日を映し空を映してしやぼん玉

羊の毛刈りし実習農学部

今日よりは夏山となる五岳かな

海光を返して枇杷の熟るるころ

初夏や家族の数の湯呑慣ふ

糸島 小林 朱夏

春の鴨母亡きあとのこの世とは

電柱が等間隔に麦の秋

傾くる傘が四葩を潰しけり

座布団をすこしはみ出しピールつぐ

名水に泳がせて見る目高かな

福岡 亀井 紀子

病身の母の遠慮や花杏

菜の花や右に左に兎の走る

野良猫のふつくらとして辻の春

夏燕海に食はれし大巖

指切りで誓ひしことも花蜜柑

山梨 野畑 さゆり

囀りや紐とり替ふる登山靴

控へめに戻りて来たり恋の猫

桃の花百三歳の祝ひ膳

古書店のほどよき暗さ春惜しむ

登校の列のあとさき夏つばめ

福岡 栗原京子

満開の桜が隠す裁判所

チューリップ女人の膝の丈に揺れ

高僧の数珠の輝き聖五月

時過ぎて透明となる花筏

草刈りて藩祖の墓の開かるる

東京 古川夏子

春の土子らの軍手の真新し

路地裏の鉢に育てて諸葛菜

石垣の一枚巨き城桜

黒土の畑の広ごり里桜

流れゆく正史裏面史花筏

東京 山田正子

急流を越えて組み出す花筏

牡丹の白も色なり闇の中

少年は寡黙となりて卒業す

コツコツとハイヒール来るみどりの夜

緑蔭に知らぬ子もゐる紙芝居

大阪 青木朋子

花明りめざし登れば母の里

井戸の辺の枝垂桜の百年経

命日は三月末日母姉妹

姉の遺児母となりけり八重桜

亡き姉と同じ名のひと月朧

空作品抄
柴田佐知子抽出

春眠しこの世を捨ててしまふごと

ぎりぎりの穴の寸法蛇出づる

病人の怒り深まる濃山吹

うすらひを卑弥呼が鏡かざすごと

豆の莢もやしのひげや亀の声

鯉の水尾広がる五月来たりけり

竹の子の逃げ出すやうに生えにけり

甕棺に榊の残る臙かな

水仙の陰のすいせん切りにけり

青嵐弱足二本に杖を足す

じやがいもが好きじやがたらの花が好き

高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗

だいじみどり

野 上 杏

矢野百合子

宮井 知英

樋口みのぶ

吉村 撰護

戸 栗 末 廣



黄たんぽぽ一茶は犬を飼つて居た

霧吹きをして仕上がりぬ花御堂

風鈴の一斉に鳴る陶器市

植木市天守風に旗靡く

脇息へ棋士の重みや青嵐

屋上の空広々と卒業す

苗札を抜きて名前を確かむる

一斉に立ち上がりたる春野かな

今日よりは夏山となる五岳かな

座布団をすこしはみ出しビールつぐ

病身の母の遠慮や花杏

登校の列のあとさき夏つばめ

少年は寡黙となりて卒業す

花明りめざし登れば母の里

朝寝してけふの終はりし心地かな

鳳 蛮 華

井浦美佐子

あさなが捷

田岡千章

山内 碧

吉田 菫

苑 実 耶

今井春生

松田明子

小林朱夏

亀井紀子

野畑さゆり

山田正子

青木朋子

天谷翔子

村捨てし人も来てゐる春まつり

看の字は手と目を重ね臙かな

白鳥の恋の鞆当て波しまく

種浸す水にひと声かけにけり

鳥籠の鳥は水浴び鳥帰る

食料は高きに吊すキャンプかな

風に乗り路地を出てゆくしやぼん玉

標本の鱗鱗の支柱夏立ちぬ

鴨引いて風の湖面となりにけり

焼かれても子の骨若し花ミモザ

蒲団干しあり蜂蜜が垂るるやう

山桜もんぺの膝のすぐ汚れ

満開も散るも桜のほめらるる

またも子が這ひ出してゐる花薙

綿雲に綿雲乗りて弥生来る

柴田志津子

田代貞枝

押田裕見子

戸栗末廣

小林朱夏

栗原京子

田岡千章

秋千晴

森俊人

白水良子

織田高暢

原友子

長節子

石川叔子

田邊豊子



神々の寝そべる壁画春の波
母の手を自ら離す五月かな
花屑の縁取つてゐる潦
有明の一樹が鷺を放ちけり
いぬふぐり空に旋律地に詩編
菜の花の堤を花菜風と行く
通院の車窓に束の間の桜
囀りや草履ひとつのたたき土間
耳ちぎれ町内走る恋の猫
鯉のぼり波間に沈む幼帝へ
玻璃あかりあつめて夜の牡丹かな
裏店の桶屋健在日の永し
藤の香の漂ふ寺院蜂の飛ぶ
津波訓練園児の背後は春の水
花屑のちりこんでくる川下り

清水量子
仲里奈央
えとう樹里
守永ハツエ
古川夏子
遠山のり子
小川涼
林徹也
後藤園子
乾有杏
山口弘子
酒井みち子
井上義郎
ふじの茜
森真二

空集

柴田佐知子選

福岡 田代 貞枝

水温む母に許されたる思ひ

京都 天谷 翔子

看の字は手と目を重ね臍かな
花けふる白き月夜を帰りけり

花衣脱げば花びらこぼれけり

はくれんの開きたる枝のみ揺るる

病む人をしばし忘れて花の中

船を待つ列に風船加はりぬ

紫雲英田の畦行く医師の黒靴

ほほづゑの窓いつぱいに桜かな

占ひに長寿と出でし万愚節

海鳴りの方へ方へと松の芯

綿屑の付きしと見えて小蝶なる

糸田 宮井 知英

朝寝してけふの終はりし心地かな

春光や鏡に心見透かされ

春障子越しに聞かれし昨夜のこと

花郁子や夜来る鳥は拒むべし

竜天に登る飛行機雲連れて

福岡 柴田志津子

足搔きても儘ならぬもの眠草

終の鴨たちたる湖の広くなる

悲しみも底を突く頃柚子の花

街路樹の結葉婆娑と剪られけり

あいの風身重のやうな月上り

村捨てし人も来てゐる春まつり

白鳥の恋の鞆当て波しまく

北邊道 押田裕見子

鯛釣りに恵比須よろめく里神楽

目鼻得て耳も欲しがる雪達磨

里神楽鬼のひそめる太柱

振り上げし拳を下ろす雪月夜

手習ひに縫へる一つ身日脚伸ぶ

海苔焼いて母の一日生まれり

糸島 小林 朱夏

雨垂れの二つ三つ四つ日の永き

網元がよしと頷く桜鯛

群れなさぬ一羽を残し鳥雲に

鳥籠の鳥は水浴び鳥帰る

紙雛色を散らして流れけり

熊本 松田 明子

給食におかはりの列山笑ふ

かんばせを御簾のあはひに御所雛

解剖の実習教材蛙捕る

野の花ものせて雛舟流しけり

果実酒を揺する外なし梅雨永し

蒼天を押し上げ鶴の帰りけり

食料は高きに吊すキャンプかな

福岡 栗原 京子

阿蘇の風吹き込んでくる植木市

果てのなきデータ入力新茶汲む

迂回して田を満たしゆく春の水

共同の農具とり合ふ田植かな

きさらぎの風に耳朶一つづつ

兵庫 戸栗 末廣

剪定のしるしや赤き紐付けて

かげろふや父の服着て田に立てば

星の名の列車が通る花菜畑

種浸す水にひと声かけにけり

ジョギングの束ねし髪が跳ねて春

花ミモザ大きな風を孕みたる

身上は早寝早起き花菜漬

大阪 田岡 千章

木蓮の白の残れる夜空かな

菜の花や端切れ編み込む藁草履

くちなはの渡りきつたる水昏し

桜咲く名の読み易き昭和の子

空作品評

柴田佐知子

水仙の陰のすいせん切りにつけり

樋口みのぶ

説明を要しないほど明快な句。同じ高さに咲き揃った水仙。よく見える手前の花は残し、奥に缺をを差し入れて切る。私もよく同じことをする。へすいせんというひらがな表記に、陰でひっそり咲く花へのやさしい眼差しを感じる。

青嵐弱足二本に杖を足す

吉村 撰護

内容は重いのだが、衰えた足と杖とが同質となったかのように軽やかに詠み下ろされている。この軽やかさは、自分を客観的に見る作者の厳とした作句精神に裏打ちされたものである。句の芯が強いのである。

風鈴の一斉に鳴る陶器市

有田の陶器市であろうか。軒を連ねた窯元に、売りの物の陶製の風鈴がたくさん吊るされているのである。う。へ二斉にによって風が過ぎる一瞬が涼やかな音と共に鮮やかにとらえられている。単純な美しさがあ

ぎりぎりの穴の寸法蛇出づる

中田みなみ

「蛇穴を出づ」は、温かくなって冬眠していた蛇が這い出して来るといふ春の季語。竹林を囲む石垣から蛇が出てくるところを何度か目にしたことがあるが、こんな所からよく出てきたものだという小さな隙間だった。へぎりぎりの穴の寸法」といふ思いがけない措辞が、おかしみと新しさを与えている。

竹の子の逃げ出すやうに生えにけり 矢野百合子

竹の生命力は旺盛だ。地下茎を伸ばし隣家の敷地に新芽の竹の子が生えてきたりする。掲句は竹山の端の景だろうか。竹林をはみ出して頭を出した竹の子が、独自の言語感覚によって「逃げ出すやうに」といきいきと表現されている。